

しんこうねん あ
「信仰年」に当たって



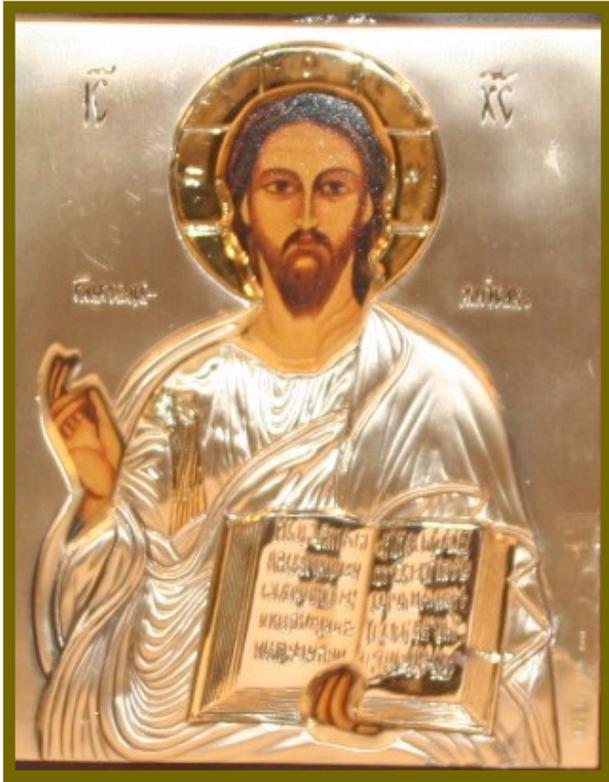
ANNO DELLA FEDE 2012
2013

だい こうかいぎ しゅうねん き
* 第2 バチカン公会議の50周年を機に、
10月11日(木)から全世界のカトリック
教会は「信仰年」に入ります。—(2013
年11月24日まで)—イエス・キリストを
信じることは何か、ということについて
わたし 一人ひとりが新たに、真剣に祈る
うちに考えるようにと呼びかけられてい
ます。—その下準備の一環として、8月号
と9月号の「司祭のてがみ」の中で、「第
2バチカン公会議が目指したこと」につい
て一筆書かせていただきました。今月の
「てがみ」にも引き続き第2バチカン公
かいぎ いちめん しんと しめい やくわり
会議の一面～信徒の使命と役割～につい
すこ はなし
て少しお話したいと思います。

こうかいぎ かいさい いぜん
* 公会議が開催される以前にすでに
「AGGIORNAMENTO」(アジオルナメント)
と「SOURCE (スルス) に戻ろう」という二
つひょうげん しんぶん おおみだ
つの表現がたびたび新聞の大見出しにな
っていました。



* 「AGGIORNAMENTO」(アジオルナメント)
8月号にはその言葉(ことば)を引用(いんよう)しましたが、こ
のイタリア語の言葉は、故教皇ヨハネ23
せい しょう ことば
世が使用した言葉です。公会議(こうかいぎ)の開会(かいかい)
演説(えんぜつ)の中で、教皇(きょうこう)はご自身(じしん)が投げかけた
その言葉についてご自分の考え(くわい)を述べま
した。それは—“時のしるし”(とき)を見極(みきわ)
め(きょうかい) 教会(きょうかい)の教え(おしえ)、教会(きょうかい)のあり方(ありかた)を「現代(げんたい)に適(てき)
したものに(に)する」ことを目指(めざ)すべきです。
せかい こっこく へんか
世界(せかい)は刻々(こっこく)と、そして大きく変化(へんか)している
のに、教会(きょうかい)は旧態(きゅうたい)依然(いぜん)、閉塞(へいそく)状態(じょうたい)にある
から、「キリスト教(きりすとけう)の教え(おしえ)のすべて(すべて)が現代(げんたい)
の人(ひと)から、新たな熱意(あらかねい)と明るい穏(あかおだ)やかな
こころ も おか
心(こころ)を持って迎(むか)えられる」ために、教会(きょうかい)の窓(まど)
を大きくひらいて、今の時代(じだい)にもっと適(てき)応(おう)す
る必要(ひつよう)がある—ということでした。



* 「SOURCE(スルス)に戻ろう」。「SOURCE」(スルス)はフランス語で泉、源泉、根源を意味しています。それに「戻ろう」と。つまり、教会は信仰の遺産のすべてを本源であるイエス・キリストから汲み取らなければならないということです。そのために、聖書と聖伝に戻り、そこから再出発しようということです。



—その“精神”は多くの文章や決定を通して具体化されました。— その中で特に「信徒の使命と役割」が教会にとっていかに大切なことかが強調されました。

* 信徒の使命と役割

公会議の後、“スローガン”ともいえる次の言葉が流行りました。「聖職者中心の教会理解は信徒中心へとその重心を移した」と。この“スローガン”はどこまで公会議の“精神”を反映しているかは別にして、確かに公会議は信徒の使命と役割を新たに認識し、そのことが重視されたことは事実です。[教会憲章(第4章)][信徒使徒職に関する教令][現代世界憲章]。—ところで50年経った今、公会議の文章は本当に理解され、—特に聖職者から—公会議が望んだことは実施されているでしょうか。



* 去る8月26日のカトリック新聞の中で
鹿児島教区の元教区長 糸永真一司教は
次のように興味深い意見を述べていまし
た。「公会議開幕から果たして信徒中心の
教会は実現したかと問えば、答えは否であ
ろう。早い話が“信徒使徒職”という言
葉ばかりかその実態までが今の教会から
消え、なくなったのではないか。」

「確かに独りで使徒職に励む信徒はいる。
教会活動に協力する信徒も少なくない。
だが家庭や地域社会、そしておのおのの
職場の福音化のために組織された信徒
使徒職が見えない」と。

そして著者は「公会議の想いに応えるた
め」…「福音宣教の最前線に位置する
小教区自体が信徒使徒職団体として」
活躍するように呼びかけています。—
大震災の地で大勢の信徒が汗をかき、様々
なことを犠牲にして援助している信徒が
多くいることを忘れてはなりません、
糸永司教が言おうとすることに耳を傾け
ることは非常に大切な事だと思います。

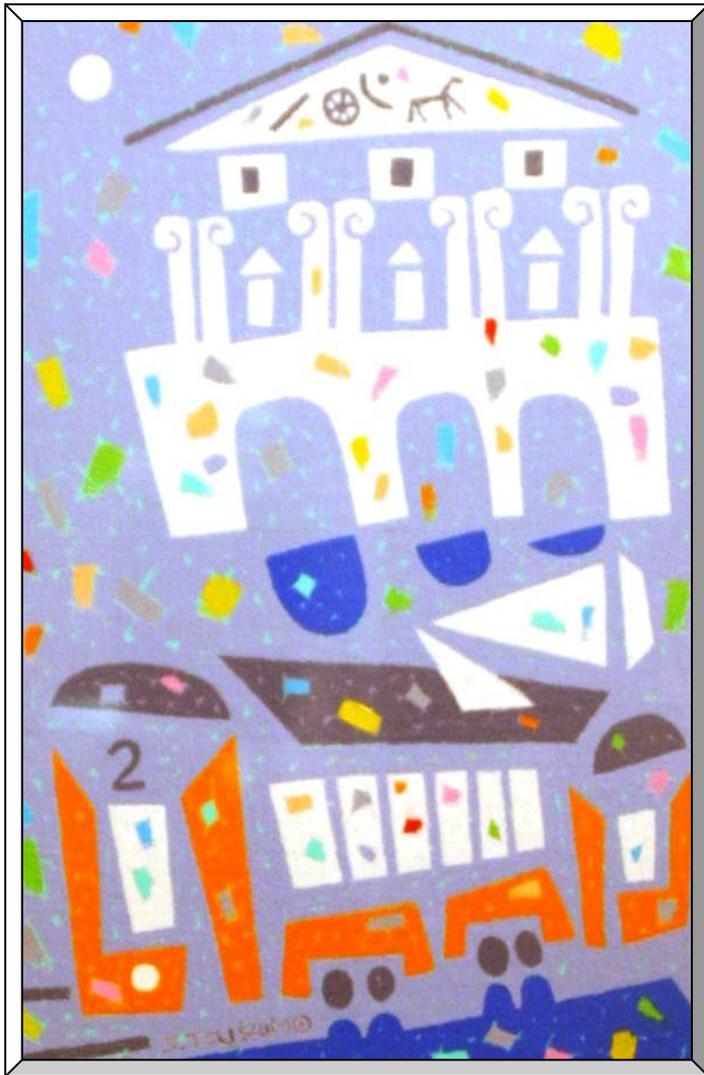


* 同じ8月31日ミラノ教区（イタリア）
の元教区長、2005年に教皇候補にも挙げ
られたマルティーニ枢機卿が亡くなりました
（85歳）。8月8日のインタビューの
中でマルティーニ枢機卿は次の事をおっ
しゃっています。



「教会は疲れている。聖堂が大きすぎて、
修道院は空になりつつあります。…教会
は200年も時代遅れになっています。
官僚組織が肥大化し、儀式と服装ばかり
が仰々しい。「恐れは勇気に打ち勝って
いる。何を恐れているのか。信仰、信頼、
勇気は教会の拠り所です。」「私たちは民
衆に近づき、対話すべきだ。教皇や司教が
先頭に立って、自らの間違いを認め、
根本的な変革への道を歩み出すべきです」
と。

すぐれた聖書学者、信徒のために、信徒と
 共に尽きることはないエネルギーを注い
 だ偉大な牧者だったマルチーニ枢機卿
 の遺言とも言えるそのインタビューの
 言葉に大いに賛成致します。常に吹いてく
 る聖霊は公会議の文章の上に静かに降り
 てきた埃を拭くことができるように祈り
 ながら…。



*偶然のことでしょうか。同じ8月22日
 から26日までルーマニアのヤシで開催さ
 れたカトリックアクション国際フォーラ
 ム第6回総会宛てに送ったメッセージの

中で教皇ベネディクト16世は次のことを
 述べています。「信徒は聖職者の単なる協
 力者としてではなく、教会生活での共同
 責任者としてのメンタリティーの変化が
 必要です」と。—

その言葉を肝に銘じて、私たち一人ひとり
 がそれぞれの立場において、イエス・キリ
 ストの福音を伝え証しすることができる
 ように新たに決心することは、「信仰年」
 に相応しいことではないでしょうか。

